

【画家】のハンドアウト

★前置き

ハンドアウト情報はボリュームがあります。

2, 5~7 頁の内容を読むだけで事件解決が可能です。

4 頁の内容は全て覚える必要はありません。読まなくても問題ないです。

目次 (全 8 頁)

1 頁：このページです。目次とキャラクターネームが記載されています。

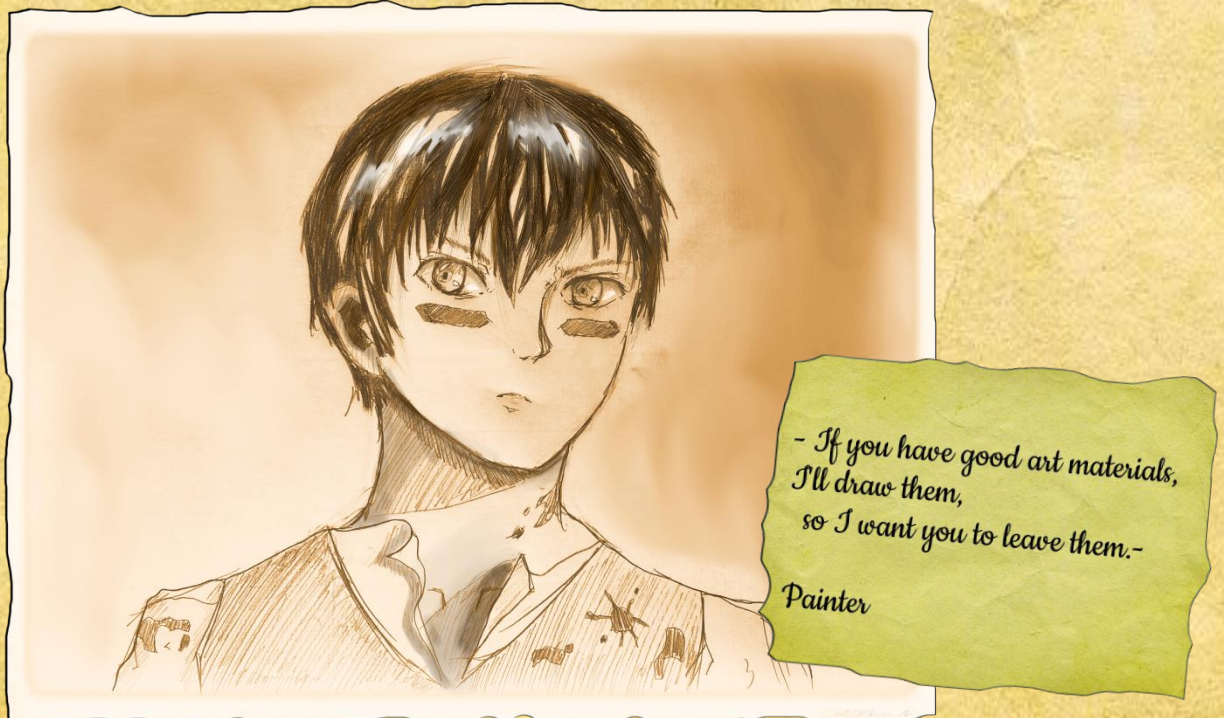
2 頁：目的、行動指針、他人物との関係など、基本的な情報が載っています。

3 頁：キャラクターの容姿、持ち物に関する情報が載っています。

4 頁：今に至るまでの旅路情報です。4 頁の内容は事件には直接関係ないため、見なくても事件解決は可能です。
ただし、エンディング分岐に関する要素が含まれています。
目を通しておくと話の掘り下げもしやすくなるため、確認推奨です。

5~7 頁：事件直近の時系列が載っています。事件解決する為の詳細情報です。

8 頁：5~7 頁の時系列情報を簡潔にまとめたサマリです。5~7 頁より情報精度は低いです。



- 「いい画材があったらそれで描くから置いて行ってほしい」 -画家

本名：リッキー

年齢：19 歳

筆談の最後に入れる名前：画家

8 月 1 日の初期位置：セントラルシティ

画家について

セントラルシティのいたる処に絵画を描いていたが、ところどころに描かれている吟遊詩人の歌が目に入り、詩の隣に添えられた吟遊詩人の自画像にとってもムカついた。しかも近々ライブを開くそうだ。腹が立つ。

詩だけ筆談で描き残せばいいのに、なんで顔をいちいち描くのか理解できない。一場所を変えて気分一新して絵を描こうとしたが、また吟遊詩人の自画像を発見。キリがないじゃないか。自画像を描く事をやめてもらいたいので自画像の下に【吟遊詩人は凶悪】と書き記した。これでいい。あとは吟遊詩人から【悪印象を広めている張本人だと知られない】ようにしたらいいだろう。こうする事で吟遊詩人の自己主張も治まるかもしれない。

あとは最近変わった事と言えば、先日レティシア(料理人)がくれた【茶色い固形のお菓子がとても美味しかった。】初めて口にしたがこんなお菓子は食べた事がない。人生で一番おいしかったかもしれない。あれは何というお菓子なのだろう？また口にして味わいたいし、できれば今街を訪れている他の人にも食べてもらいたい。自己主張の激しい吟遊詩人には食べさせたくないが、遠方からやってきて滞在している少女の方にはぜひ食べてもらいたい。【レティシアに頼み込んで、茶色いお菓子の名前を教えてください。】そして、【レティシアから茶色いお菓子をもって少女に食べてもらおう。】

そして毎日思い付きのように絵画をして平和に暮らしているところ、セントラルシティ周辺で2つの大火事が発生した。どう見ても人為的な火事だった。誰かがこの街をハチャメチャにしようとしている。

【犯人の企みを阻止して、平和なセントラルシティを取り戻さなければならない。】

行動指針

- 1：吟遊詩人の悪評を広めているとバレないこと、周囲から印象悪く思われない事。
- 2：料理人(レティシア)から、茶色いお菓子の名前について教えてもらう事。
- 3：料理人(レティシア)から茶色いお菓子ももらい、その後少女に茶色いお菓子を食べってもらう事。
- 4：セントラルシティをハチャメチャにしようとしている犯人の陰謀を阻止すること。

人物関係

吟遊詩人の印象：詩の内容はまだしも、掲示板に残していく自画像がとにかく嫌。いちいち「吟遊詩人エウダモス」と名前を書き残していくのも腹が立つ。詩や楽器に関する知識は素晴らしそうだがまともに会話したことがない。少し年上の気取った男性だ。近々セントラルシティでライブをする様子だがあまり興味がない。どうせ筆談で描かれているような詩を声に出すだけだろう。早くセントラルシティから出て行ってくれる事を心待ちにしている。

料理人の印象：放浪中の9年前にセントラルシティに到着してから、ずっと一緒に過ごしてきたやさしい姉のような存在でもはや家族。作る料理・お菓子がおいしく、心の底から信頼を寄せている。普段から料理を作るからなのか体力があり力強く、知識も豊富だ。自分が最近一人前になったからか、彼女の店“レティシア・デ・モノポール80”の店番を任される事が多くなった。本当は少しめんどくさい気持ちはあるけど協力しよう。彼女の名前は“レティシア”だ。

少女の印象：白いワンピースにブーツを履いて荷物を沢山持っている同年代くらいの少女。昔放浪していた自分と同じく、現在大陸を放浪中の様子だ。何やら物珍しい物をたくさん持っている様で、カバンも手持ちと大型の2つある事を確認している。境遇が似ているからなのか、日常会話も共感する事が多くて楽しい。

彼女の事をもう少し知りたい気持ちがあるが、少し怖いところもある。なぜなら彼女がナイフを持っている所を目撃した事があるからだ。物騒な事に使われていない事を信じたい。彼女は鼻づまりを起こしているようだ。

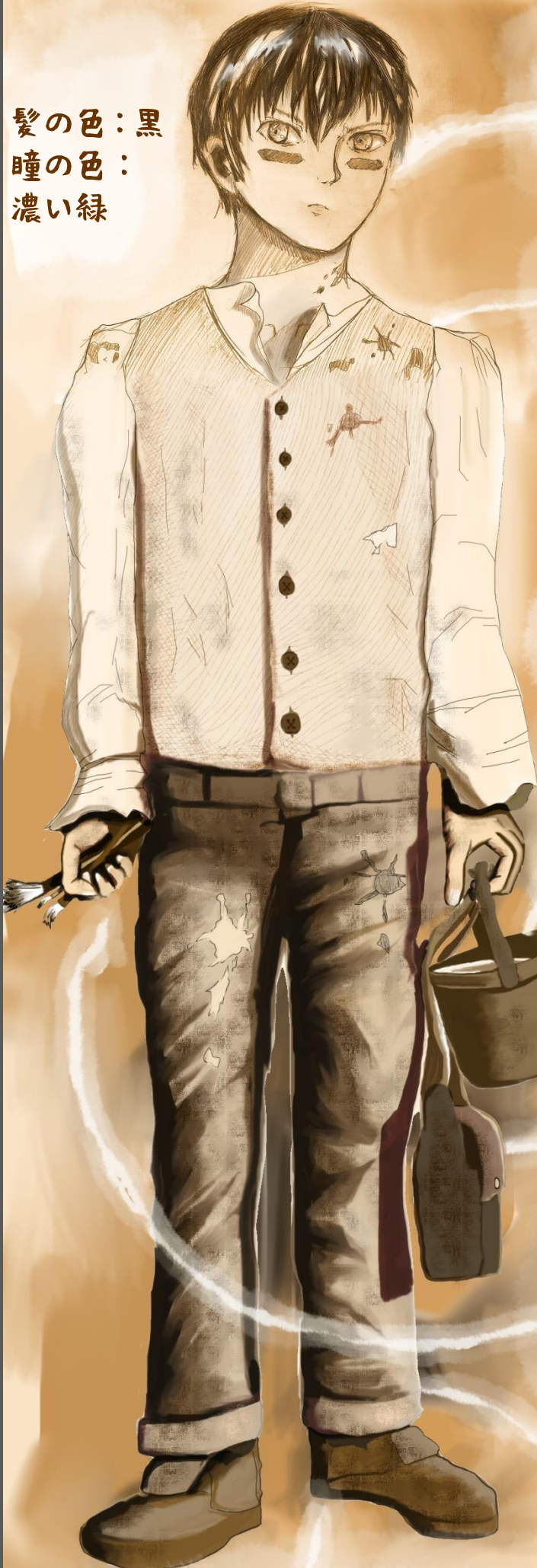
??の印象：よくわからない。セントラルシティをよく行き来するただの旅人だろう。

全身・顔を黒い色の服で隠しており、素性を明らかにしたくなさそうな挙動をしているが自分はあまり気にしていない。

すれ違った際に服の中から男らしい褐色の腕がちらりと見えた事と、遠目から見て背が高かったため、男性だと思っている。

暗い色の
アイブラック
(気分で模様を変えたりする。)

髪の色：黒
瞳の色：
濃い緑



白い長袖シャツ
(旧文明の服屋跡地にあつた物)

茶色のベスト
(服職人からもらった物。
顔料が付着し汚れている。)

★水彩用バケツ

このアイテムは火事を消火できる。水彩バケツを所持していると火事発生地域に侵入可能となり、侵入と同時に火事が自動鎮火する。(以後他人も鎮火した場所を行き来できる)一度使うとアイテムはなくなる。

★紺色の手持ちカバン

(旧文明のビル廃屋にあつた物、
中が赤青黄など色んな顔料で汚れている。)

★ペン・旅日誌 (母親の形見)

★彫刻刀

★木製筆具

(水彩用や油彩用など9種9様。)

★顔料(紺玉、辰砂、黄土の色の三原色)

★汚れた布巾

(顔料を拭く時に用いる)

紺色のジーンズ

(旧文明の服屋跡地にあつた物、
顔料でかなり汚れている。)

濃い茶色のスニーカー
(旧文明の靴屋跡地にあつた物)

★=ユドナリウム上でカード化されており、アイテムカードとして所持しています。

★は推理・進行に影響を及ぼす可能性があります。

赤い★マークである場合、ユドナリウム上で他人から見えているアイテムである事を表わします。アイテム名称の赤字部分のみが他プレイヤーが把握できるようになっています。

セントラルシティまでの旅路 (このページの情報は事件と関係ありません。)

- ・セントラルシティ設立前9年：旧シカゴで放浪中の両親の下1人っ子として生まれる。
- ・セントラルシティ設立前4年：親から世界構造について毎日教えられるが、よく理解できなかった。
- ・セントラルシティ設立前3年：山岳地帯超えの際に略奪者に襲われ、母親と共に逃げる。
この時、父親と離れ離れになる。
- ・セントラルシティ設立前2年：この時から、自分の身を守る為に身を鍛え始める。
- ・セントラルシティ設立前1年：旧テキサスの街を母親と訪れていたところ、略奪者に襲われて街は壊滅。
母親が襲撃に会い死亡してしまう。
街から逃げる人の後を追って、放浪する。
- ・セントラルシティ設立元年：この時、生存者を捜し続けている。
ついでにサバイバル知識と絵心に目覚める。
- ・セントラルシティ設立2年：セントラルシティへたどり着く。
すぐにレティシアにかわいがられ、実姉のように接する。
- ・セントラルシティ設立8年くらいまで：セントラルシティ周辺地域をレティシアと鬼ごっこして遊んだり、
2人で絵を描いたり、2人で料理を作ったりした。
また、他に街に滞在している人とも交流を楽しんだ。
- ・セントラルシティ設立8年：厚塗りを覚えはじめ、シティの外壁やベリー・ベリー・タワーを中心に
落書きをし始める。
- ・セントラルシティ設立9年：砂画を覚える。サマーリゾートのビーチに巨大な鳥を描いて楽しんだ。
- ・セントラルシティ設立10年：テンペラを覚える。
レティシア・デ・モノポール'80看板に落書きをしてしまい
レティシア・デ・モノポール'80の看板を改造。怒られる。
- ・セントラルシティ設立11年：セントラルシティに滞在中、事件発生

事件の数日前まで

下線のある文章 = 画家の台詞を示します。

フォントの異なる文章 = 筆談を示します。(下線付きは自身が描いた内容)

色文字下線 = 他人を発見した事を示します。(黒背景は相手が誰か不明)

6月24日までの間 セントラルシティ周辺を歩き回って以下の出来事があった。

- 吟遊詩人エウダモス、名前を書いていない人の2人分の筆談が直近にあった事を認識する。
- 全身を黒い服で隠した旅人とすれ違ったが、会釈しただけで会話をしなかった。全身が服で隠されてよく見えなかったが、男らしい褐色の腕がちらりと見えた。

6月25日 突如レティシアが店からいなくなった。残されたのは掲示板に描かれた「7月25日にここでまた逢おう」という筆談のみで、理由はよくわからないが一方的に店番を任された…めんどくさいな。レティシアの頼みだしやるけど。店の中の調理道具がいくつか無くなっている様子で、店頭には大量の保存食料がずらっと並べられていた。こりゃ本当にしばらく戻ってこなさそう。独りで勝手にレティシアと競い合ってた「どちらが先に店番に現れるか勝負」もできなくなったので、退屈だ。

7月24日までの間 セントラルシティ周辺を歩き回って以下の出来事があった。

- フロリダから来ました、という名前の筆談が直近にあった事を認識する。
- 同年代くらいの白ワンピースの少女と対面して、今までの旅路の話など交流を行なった。
- 吟遊詩人の詩と自画像が各地に刻まれているのを見て腹が立ってくる。吟遊詩人の悪評をセントラルシティ周辺の至るところに書いた。
- 行商人から辰砂の顔料を売ってもらった。絵画手法に幅が増えそうだと感じた。
- 1人で各地に絵描きをし続けていた。

7月25日 今日は約束の日だ。店番をして待っていると通りの遠くからレティシアがやってきた。やっと店番から解放される…ほっと一息。彼女に1か月分の文句を言ってやろうと思ったが、彼女はすっと「新作お菓子」と称する包み紙に入った板状の物を机に置いた。「食べてみて」と言われたので包み紙を破ると光沢のある茶色い固形が姿を現した。これは一体なんだ？おそろおそろ口に入れると…衝撃を受けた。美味すぎる…今までの人生で食べた物で間違いなく一番美味かった。「なんだこれ？！ありがとう！」と言ってお礼をすると彼女も安心した様子だ。貰った茶色い菓子はそのまま全て平らげた。美味い…

このまま文句を言うのは彼女に悪い気がしたので、雑談に切り替える事とした。1か月の間に上手くなった自分の絵画を披露したり、1か月の間の近況報告などをした。

また、「7月30日に店の朝番手伝いしてほしい」とレティシアからお願いされ二つ返事で承諾した。あんなお菓子貰った後じゃ、色々と力になりたいよ。多すぎる店番は勘弁だけど。その後は店片付けなどを行なってそのまま夜まで過ごした。

7月26日 店でレティシアと昼ごはんを食べている時にサマーリゾートの方角から合唱が聞こえた気がした。それにレティシアは気づいたそぶりがなかった。そういえばライブの日も近づいているし、ライブする奴が練習しているのだろうと感じた。あんまり興味ないけど。

7月29日 今日も今日とて吟遊詩人の悪評を広めて、気ままに落書きをしていた。森林公園跡地で森林浴しながら散歩。毎日何も考える事の無い気ままな生活。そういえば明日はレティシアから店番を頼まれていただけ。「7月30日朝にレティシアの手伝いをしに行く。」と掲示板にメモした。明日だし忘れる事はないだろうけど。寝坊しないウチに今日は早めに寝よう。

事件発覚の2日前：7月30日朝

雨に打たれながら森林公園跡地で目を覚ました。空は朝なのか夜なのか一見わからない程一面が薄暗く、目覚めが悪かった。今日は前に言われた通りレティシアに店番を頼まれている日だ。起き上がって服についた落ち葉を掃って雨に当たらない様に森の中を歩き回る。

朝ごはんはいつも食べているお気に入りの果実の樹を見つけ、枝から取って実を採ってそのまま食べる。この果物は本当に美味しい、名前はなんていうのだろうか？続々と房から実をちぎり、しこたま口の中に入れて森林の中を歩いていると、近くの茂みの中に男がいた…これは、あの自画像のいけ好かない吟遊詩人だ。本当に自画像通りだった。奴は屈んで何かをしている様子だが、あれは何をしているんだ？何か探している様にも見えるが、奴は嫌いなので特に話し掛けもせず森林公園からセントラルシティの方角へ向かって歩き、やがて森を出た。

暫く歩くとセントラルシティに到着。いつも薄暗い廃屋街が今日はより鬱蒼としている。駆け足で走ってレティシアの店についたが、まだ彼女はいなかった。店に早くついたし今日は俺の勝ちだな！「レティシア店番来るのおっそ」と掲示板にいたずら書きして、店頭で待っていると「ごめんごめん」と言った表情でレティシアがどこからともなく走ってきて現れた。疲れ顔の彼女にさっき掲示板に描いた筆談と一字一句同じ内容を言ってやり、彼女はムッとした顔を見せて「そんなの描かなくていい」と呆れながら返された。彼女は筆談を描いた後に店中に入ってくる。

7月30日昼

雨が降る中、2人で担当分けして店の作業をしていた。レティシアは店頭で保存食料を並べる作業。自分は店内の片づけ作業だ。老朽化して風通しが良い店のため、すぐ散らかってしまうのが困りごと。床掃除をさっさと終わらせてキリが良くなったため「レティシア、掃除終わった！昼にしよう！」と叫び彼女を呼び寄せる。店の外から「いいよ」と返答が聞こえた後にレティシアが店に入ってきて、2人でキッチンから食料を運ぶ。名前の分からない生の果物と干し肉・ドライフルーツをテーブル上にドンと置き、テーブルに着いたあとはいつもの食事。

果物は絞ってジュース状にして飲み、机上の物を次々口に入れるだけの食事。この味も飽きてきた頃だ。「たまには違う物食べたいなあ。」「自給自足だしこればっかだよ。」「旧文明の店にあった魚の缶詰、食べても平気だったよ」「この前は腹壊してたじゃん」レティシアは料理が得意なので、ねだって珍しい物を作ってもらって試みたがイマイチだ。その後は様に絵画の話や近場の風景の雑談をしていた。机の上が空いてきて食事が落ち着くと彼女から「掲示板掃除をお願い」と頼まれた。さっき掃除したばかりだし、「また掃除!？」思わず口に出す。レティシアの願いはいつも雪崩の様に突然押し寄せてくるのだ。

干された雑巾を取り濡らし、店の目の前にある掲示板の前に立つ。今日は俺が掃除する番だけ？まあいいやと思いつつ店の外に出て掲示板を見ると、掲示板に吟遊詩人の落書きがされている事に気が付いた。またあの野郎か。いつ来たんだ？

掲示板を眺めている間に廃墟ビルの通りから少女が歩いてやってくる。店に案内する前に掲示板を見るように促し「この男は凶悪だから注意しろよ」と吟遊詩人の悪評を少女にもれなく伝えた。ついでに掲示板に同じことを描き記し、少女が店に入ってから吟遊詩人の筆談に辰砂顔料で落書きした。もう似顔絵はムカつくからやめろよ！道具を出すのがめんどくさかったので指を使って塗りつぶした。

その後店内に入ると少女は昼食を食べており、レティシアは店頭で食材を並べる作業を行っていた。自分も店内の椅子に座り、少女と雑談をする。話の内容は、この前の初対面の時と同じ様な内容だ。2人での会話はまたしても盛り上がっていたことだろう。ふと気が付いたらレティシアの姿が見えなくなっていた。彼女は店頭の作業を終えたようで、店から離れてどこかへ出かけたみたいだ。

そういえば辰砂顔料を指で使ったままだったので、白い食器が辰砂に汚染されてしまった。またレティシアに怒られちゃう。手に付いた辰砂顔料を拭こうと、立ち上がって少女の後ろにある自分のカバンの中に手を伸ばしたが、カバンに手を入れてからこれは少女のカバンだと気が付いた。自分のカバンはすぐ隣にあったのだ。色が似ていて気が付かなかったせいで彼女のカバンの中を汚してしまった。「汚しちゃったごめん」と少女に声をかけたが、気にしていないそぶりだった。やさしいなあ！

日も暮れてきて、暇だし足を動かしたくなってくる。「第16港灣都市へ散歩しにいかない？」と少女に声をかけると「そこより今は他に行きたくて。古びた展望台に行かない？」と鼻声で答えられた。「おっけー」とうなずく。通り道だし良いかな。

出かける支度をして店を出る、スキップする少女の後を追って第16港灣都市の方向へ歩き始めた。少女は凄く楽しそう。周囲を眺めていると廃墟の影で屈んで隠れている極悪吟遊詩人を発見した。また奴だ、相手はこちらに気が付いていない…何をしているんだ。見てみぬふりをして少女の背中を追った。手に付いた辰砂の顔料は服の中にあつた布巾を用いて取り除き、服に戻した。

7月30日夕方

日没し、辺りがオレンジ色に染まった時刻、少女と雑談しながら道中の第16港灣都市を歩いていた。周囲の景色を見ながら色んな話を話した。しばらくすると通りにある掲示板が見えたので、そのまま筆談を確認しようとしたが、その掲示板の背後にある家の中に誰かの気配を感じた。少女も同様に気配を感じ取ったようで、少し不安になったので見るのをやめて、ボートがある港の方へ2人で駆け足で向かって行った。

7月30日夜

2人でボートを漕いで展望台がある小島に到着し、展望台の方まで歩いてそのまま少女と一緒に夜景を見た。北から南まで空一面澄んで、色んな星座がよく見える。自分も少女もその光景に感動していただろう。どこが一番いい景色になりそうか2人で展望台周りを歩き回った。こっちからの景色もいいなあ。あの星座はなんだろう？

歩きながらサマーリゾート別荘街の方角をちらりと見ると人影が1つ動いていた。パッと見て男の体格だった。こんな時間に人が…？何をしているんだ。少女にも男がいる事を伝えようとした瞬間、突如辺り一面が白く光り輝いて思わずビックリした。今のは何の光だ?!少女の「うわっ」という声と同時に男も気が付いたようで「誰がいるのか!？」男は叫んできた。その声色は聞いた事のない男の声だった。右手に大きな楽器のような物を持っている様に見えたため、吟遊詩人だと予想する。

吟遊詩人はここでも何かしているのか…どこまでも凶悪な奴だ。じっと身を潜めていたところ、少女から「ここから逃げよう」と提案されたため、即同意して展望台から離れてボートに乗りこの場を去った。

暗闇の第16港灣都市についてボートから降りると少女と別れた。色々と疲れて何話したか覚えていない。気が付いたら少女の姿もないし掲示板に展望台の事で何か筆談を描いた気がする。自分はセントラルシティに戻ってレティシアの店で寝よう。暗闇の店に戻るとレティシアがもう寝る支度をしていて、自分も気を失うように横になり寝た。

事件発覚の1日前:7月31日朝

レティシアに起こされ目覚める。あんまり眠れた感じがしなかった。体を伸ばして立ち上がると、2人で食べ物を運んでテーブルに着く。眠かったので干し肉をかじかじ喉奥に入れていき目を覚まさせていく。

食べている最中にレティシアから「昨夜遅くどこ行ってたの?」と聞かれたため「少女と一緒にリゾートに…」と答えた。それを聞いたレティシアは神妙な顔つきで店の外へ出て行った。何今の顔?疑問に思いながら保存肉を食べ終わり外のレティシアを見に行くと彼女の姿はどこにもなかった。どこにいったのだろうか?入り口横にある掲示板を見ると「リッキー今夜番お願い。あとから私も一緒に夜番する」と掲示板に描いてあるのを発見する。朝一緒にご飯を食べたのだから直接言えばいいのに?

レティシアが出かけてからは食器片づけしていた。ある程度片付け終わってから店頭を見ると、そこにはよこしまな吟遊詩人の姿があった。またこの男は…吟遊詩人と目が合ってしまう「これもらうね」と奴は一言話し、干し肉を指さした。さすがに昨日の事があったのに無視はないだろう。「昨日1人でここそ何をしていた?」とサマーリゾート別荘街で何をしていたか聞いた。すると「楽器を落としたので捜していた」というのだ。はあ?楽器は手に持っていただろう。「嘘を付け、お前は右手に楽器を持っていたら」と言い返すが、吟遊詩人は十数秒考え込んだ後「何か勘違いしている」とだけ言い残し一方的に話を切り上げ店から去った。なんて奴だ。

7月31日昼

日中は散歩で第16港灣都市を訪れていた。「昔はここに人が沢山住んでいたのかなあ…」崩壊したビルを眺めながら通りを歩いていると同時刻に廃漁村の方角からサバイバルナイフを持った少女が来た。

彼女の腕やナイフが赤く汚れていたが辰砂の顔料だと気が付き、なんだ少女も絵画に興味を持ってくれたのか。少しうれしい気持ちになった。話しかけようと少女に近づくと「さっき廃漁村に来た?」と言ってきたので「行っていない」と答えた。それを聴く彼女は「そっか」とだけ返事して、少女は近くにある掲示板の方へ行き眺めていた。少女は真顔で掲示板を見た後、筆談を残してセントラルシティの方へ向かって行った。少女は何をしているんだろう?自分はしばらく散歩をし続けてから夜番に備えて散歩を切り上げた。

7月31日夕方~夜~深夜未明

日没の時刻、夜番前に汗を流そうと鉄風呂のある鉾山街を訪れた。風呂の近くまで行ったが、鉾山街の街中で怒り狂った独り言を垂れ流す凶悪な吟遊詩人を発見する。また奴だ…もう面倒事に巻き込まれたくないので無視だ無視。うーんやっぱり風呂は今はいいや…吟遊詩人に話しかけもせず自分はセントラルシティの店に引き返した。

店に戻る頃には空は暗くなっており、さらに雨も降ってきていた為に走って店に向かった。店に着いたがどこにもレティシアの姿はなく店屋根が壊れていて雨漏りしている様子であった。あーあ直さなきゃ。掲示板も見てみるとまた吟遊詩人の筆談と似顔絵が視界に入ったためムかつき辰砂の顔料を手付け筆談を塗りつぶした。

時刻も夜でお腹が空いたので掲示板を見た後は店頭にあった保存食の袋を1つ取り、封を開けて干し肉をこっそり取り出し口に入れた。やっぱり干し肉は美味しい。味わっていると、そのままふっと眠くなり気が付いたら横になっていた。昨日の疲れかな…眠り際に男の歌声が聞こえたのを覚えており、それが子守唄の様に心地よかった。意識が朦朧としている間に自分の目の前に男?が来た気がするが誰かはわからなかった。

夢の中では、馬車に乗ってどこか遠い異国の地まで旅に出る夢を見た。自分の知らない風景を目的もなくただ地平線の先を目指して進むそんな風景…

ハッと目が覚めると自分の全身に毛布がかけられており、店前で寝たはずなのに裏路地の隅で目が覚めた。レティシアが毛布をかけてくれたのかな?起き上がり店に寄ってみたが誰もいない。雨漏りのしていた屋根は布で覆われて修復されていた。周囲を見回すと遠くの路地にいる黒い人影が第16港灣都市方面へ向かっていっている様子を目撃した。あれは一体誰なんだ…?!少し身構えるがせっかくなので狭い路地だしこのまま隠れて寝よう。

8月1日朝

朝1人で目覚めた。昨日まで降っていた雨は止み太陽光が雲から差し込んできており、ふと空を見渡してみる。そして、廃漁村、星日和の砂漠の方角からそれぞれ火と煙があがっているのが確認できた。一体何が起きているんだ?煙を見て反射的に拡声器を手に取り、みんなに呼びかけをとるだろう。

行動サマリ

※このサマリは4, 5頁の時系列を簡潔にまとめている内容です。
正確な情報・より詳しい情報は4, 5頁の方を確認ください。



時間	できごと	認識した人 ★互いに認識している ●見ただけ・聞いただけ
7月30日 朝1	レティシアに朝番を頼まれている事を思い出しながら森林公園で目が覚めた。朝ごはんを済ませた後に吟遊詩人が屈んで何かをしている事を目撃した。	●吟遊詩人
30朝2	セントラルシティへ到着。自分より後にレティシアが店にやってきた	★料理人
30昼	① レティシアと昼ごはんを取った。その際に掲示板の掃除をお願いされた。	★料理人
	② 掲示板の掃除をする為に店を出て掲示板を見ると吟遊詩人の筆談を目撃	-
	③ 少女が店にやって来たため、少女に筆談を見る様に促した。その際に吟遊詩人が凶悪である事も念押しして伝えた。	★少女
	④ 少女が店に入ってから吟遊詩人の筆談に指で落書きをして塗りつぶした	-
	⑤ 店に入ると少女が昼食を食べておりレティシアは食材を並べていた。	★少女・★料理人
	⑥ 少女と雑談をしているウチにレティシアは用を済ませてどこかへ行った	★少女
	⑦ 手に付いた辰砂顔料を拭こうとカバンの中にある付近を取ろうとしたら誤って少女のカバンに手を突っ込んだ。その後少女に謝った。	★少女
	⑧ 第16港湾都市へ行かない？と少女へ声をかけるが古い展望台を提案されたため、その後支度を済ませて2人で店を出た。	★少女
	⑨ 店を出たあたりで、街中でどこそそしている吟遊詩人を見かけた。	●吟遊詩人・★少女
	⑩ 辰砂顔料は服の中にあつた布巾を取り出し、手を拭いた後服に戻した	★少女
30夕	第16港湾都市を通る際に掲示板を見ようとしたら後ろの廃屋に誰かいた為やめる	★少女・★不明
30夜1	① 古びた展望台に到着して展望台を見回りながら少女と夜景を眺める	★少女
	② 男の人影が見えたため少女に伝えようとしたところ突然辺り一面光輝いた男に気づかれ声を掛けられ、吟遊詩人だと感じた。その後逃げ去った。	★少女・★吟遊詩人？
30夜2	少女と一緒に第16港湾都市まで逃げ去り、その後少女と別れた。	★少女
30夜3	セントラルシティへ戻るとレティシアが寝る支度をしていて、自分も後を追って寝た	★料理人
31朝	① 朝起きた後レティシアと会話しながら朝食をした。その後レティシアは筆談を残してどこかへ出かけた。夜番を頼まれたようだ。	★料理人
	② 店番していると吟遊詩人がやってきて口論になった。吟遊詩人は一方的に会話を終了させて、どこかへ去って行った。	★吟遊詩人
31昼	第16港湾都市に行くと廃漁村の方角から少女がやってきて辰砂顔料を手付けてナイフを握っていた。少女も絵画に興味を持ったのだろう。その後少し会話した後少女は掲示板を眺めてからどこかへ行った。	★少女
31夕	鉱山街へ行くと吟遊詩人が1人で怒り狂っていた。無視した	●吟遊詩人
31夜	① セントラルシティへ戻ると誰もいなかった。店屋根が壊れていて雨漏りしていた。掲示板の吟遊詩人の筆談をまた見つけたためまた塗りつぶした。	-
	② 雨にうたれながら保存肉を1つ食べたところで眠くなったので寝てしまう眠り際に男の歌声が聞こえた。寝る直前に誰か目の前に来た気がする。	●男・●誰か
	③ 寝てから目を覚ますと寝た場所と違うところで目が覚めた。店には誰もおらず、遠くの路地に黒い人影を見た。その後隠れるように寝た。	●黒い人影